

ところが、日露戦争のために、安い大豆粕の輸入が絶えそうになったので、泥土・堆肥などの自給肥料の増産とともに緑肥作物を奨励した。

県は郡町村農会を通じて、レンゲ（紫雲英）・緑肥大豆の種子を国の補助によって、無償配付して、その栽培を奨励、指導した。

緑肥作物には青刈蚕豆も含まれて、収量を上げた。

日清戦争・第二次大戦と、戦いのあるたび毎に、共同作業、自給肥料増産などの奨励指導はくり返えされたものである。緑肥作物は青刈（莖葉）の収量の多い品種が選ばれ播種期を早目にし、莖葉を繁茂させ、水田作業前に鋤込んだ。化学肥料が出回るにつれて、また減少していった。

(単位：貫)

表24 昭和前期緑肥作物（青刈作物）の推移

区分	紫雲英		蚕豆		青刈大豆		合計	
	反別	収量	反別	収量	反別	収量	作付反別	収量
昭和1	12				60	43,000	72	50,200
2	12	7,200			60	42,000	72	49,200
3	15	9,000			70	49,000	85	58,000
4	16	9,600			80	40,000	96	49,600
5	18	10,800			95	47,500	112	58,300
6	—	—	333	182,000	399	179,500	731	362,100
7	25	10,000	280	168,000	225	90,000	530	268,000
8	23	10,400	276	164,200	231	98,210	530	272,810
9	20	9,080	246	147,600	24	9,996	290	166,676
10	18	8,100	240	144,000	26	10,860	284	162,960
11	24	11,040	248	148,800	32	13,430	304	173,270
12	27	10,500	256	87,380	35	10,800	319	108,710
13	124	49,600	171	59,850	81	34,000	376	143,450

レンゲはフウゾウと呼ばれ、作付面積は緩いカーブで増加したが、昭和13年戦時体制のきざし濃く急増した。(東川副村誌)

四 その他

大豆

畑のない当町では、殆ど畦畔に作られ、アゼマメと呼ばれた。草丈の低い（秋大豆）品種が水稲への影響が少ないので好まれ、収量はあがらなかった。戦後は品種改良が進み、葉丈は低く多収の品種が作出されたように、県の大豆制品改良も草丈が低く、多収で、良質（蛋白含量の高い）を育種目標にした。

一時は、水稲の除草剤二四Dが出て、広く普及し、この農薬が広葉雑草を枯死させるので、畦畔大豆は大幅に減少していった。

大豆は自給作物で、豆腐替え・自家製の味噌・醤油・或いは炒った大豆を石臼でひいてキゴ（黄粉）を作るなど自家消費のためであったが、良質の植物性の蛋白質で、農村の貴重な蛋白源であった。

昭和五十三年（一九七八）の水田利用再編対策事業によって、佐賀平坦における大豆作は畦畔から下りて本田で、広面積に栽培され、完全に商品作物に成長している。

その他（大豆）